



〈一冊の本〉

芥川龍之介『羅生門・鼻』(改版) 新潮社2005年 389円



子どもの頃から「本」が好きだった。小学生くらいまでは理科系・技術系の本に興味をひかれていたのだが、中学以降は小説やエッセイに傾倒した。ジャンルにこだわりも思い入れもなく、手当たり

次第読み、気に入った作品は何度も繰り返し読んだ。特に多く読んだ作家を3人挙げよと言われれば、宮本輝・北杜夫・椎名誠だろうか。倉田百三の『出家とその弟子』は20回くらい、吉川英治の『三国志』は30回くらい読み返した(倒されたはずの張コウが何もなかったかのように再登場し、結局3回死んでいることに気づいたのは10回目くらいだった)。我ながら“雑食”が気恥ずかしい。

しかし、ここ10年ほど文学作品に接することを意識的に避けていた。理由は、のめり込んで「今やるべきこと」がおろそかになることを恐れたからである。没入度の高い作品に接すると、思考も意識も彼方へ持って行かれてしまう。仕事や研究どころではない。

とはいえ、専門書以外の活字への飢えが甚だしくなってきたので、昼メシを食べながら読む「お昼に読む本」というのを設定することにした。短時間で切り上げられるものを数冊選んでおき、その中からその日の気分で1冊手に取るようにしている。ちなみに現在のエントリーは、実用書の『コメのすべて』、ヘロドトス『歴史』、村上龍『55歳からのハ

ローライフ』、そして今回ご紹介する芥川龍之介の『羅生門・鼻』である。

『羅生門・鼻』は私にとって20数年ぶりの再読である。本書は短編集であり、収録作品にはすべて下敷きがある(たとえば表題作「羅生門」の出典は『今昔物語』)のだが、書き手の立場からすれば、それはかえって難しさにつながると思える。元のストーリーを自分なりに咀嚼する必要があるからで、むしろオリジナル作品よりも余計な手間と技術が必要になるのではないか。

20年前最も印象に残ったのは軽妙な「鼻」だったが、今回は「芋粥」に衝撃を受けた。殊に48ページから49ページあたりは、読み進めるほどに心地よく、芥川の筆力に驚嘆する。読み手の私は、豪放な「利仁」から、陽気な「従者」、そしてオドオドとした「五位」へ、さらに一転して獣の「狐」へと、違和感なく次々と感情移入の対象を移していく。特に「狐」になってからは、斜面を駆け下り駆け上るスピード感と、ぴたと止まってふり返る“動と静”。仰ぎ見る侍たちの情景がありありと目に見えるようだ。少し引用してみよう。

抛り出された狐は、なぞえの斜面を、転げるようにして、駆け下りると、水の無い河床の石の間を、器用にぴよぴよ、飛び越えて、…略… 駆け上りながら、ふりかえって見ると、自分を手取りにした侍の一行は、まだ遠い傾斜の上に馬を並べて立っている。それが皆、指を揃えた程に、小さく見えた。殊に入日を浴びた、月毛と蘆毛とが、霜を含んだ空気の中に、描いたよりもくっきりと、浮き上がっている。狐は、頭をめぐらすと、又枯薄の中を、風のように走り出した。

…やはり芥川龍之介はおそろしい。「お昼に読む本」のエントリーから、『羅生門・鼻』は外すことにしよう。

(本研究所研究員 藤本延啓 環境社会学)